

論文審査の結果の要旨

氏名：植 木 隆 一

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：咀嚼時の上顎総義歯床下顎堤粘膜の圧負担様相

審査委員：（主査） 教授 石 上 友 彦 ㊞

（副査） 教授 松 村 英 雄 ㊞ 教授 米 山 隆 之 ㊞

教授 祇園白 信 仁 ㊞

超高齢社会である我が国において、85歳以上の超高齢者の約53%が上下顎に総義歯を装着していることが示されている。これら総義歯装着者の口腔環境の保全を図ることは、高齢者の良質な食生活の維持に繋がり、活動的な社会生活を可能にすると考えられる。そのためには、義歯が円滑な機能を果たせるよう義歯機能時の負担圧を適正に配分し顎堤の状態を良好な状態に保つ方策を確立することが重要な因子の一つである。

そこで本研究は、使用中の義歯を実際に口腔に装着した状態で義歯床下顎堤粘膜の負担圧分布様相を観察することを初めて可能としたシステムを用いて、咀嚼運動を行った際に発現する咀嚼力が義歯床下組織の顎堤粘膜にどのように負担されているのかを明らかにすることを目的として行った。

実験は、上下顎実験用義歯を装着した被験者（67歳以上の総義歯装着者15名）に、代用食品として用いた歯科用ロールワッテを片側で咀嚼させ、その時の義歯床下負担圧を測定し行った。解析項目は、解析区間内に発現した咀嚼側臼歯部、咀嚼側前歯部、非咀嚼側臼歯部および非咀嚼側前歯部の義歯床下負担圧とした。

その結果、以下の結論を得た。

1. 咀嚼側の義歯床下負担圧は、被験者9名で臼歯部が前歯部に対し有意に大きい値を認めた。有意差を認めなかった被験者の中の4名では臼歯部に対し前歯部が大きい値を示し、その中の1名は値の範囲も前歯部が大きかった。
2. 非咀嚼側の義歯床下負担圧は、臼歯部と前歯部で有意差を認めなかった。有意差を認めなかったが14名の被験者では臼歯部に対し前歯部が大きい値を示し、その中の8名は値の範囲も前歯部が大きかった。

以上のことから、咀嚼力が義歯床を介して義歯床下組織に負荷として伝達された際には、咀嚼側で臼歯部顎堤への負担圧が大きく、その際に咀嚼側および非咀嚼側前歯部顎堤にも常に負荷が加わり粘膜は移動や変形といった現象を招いていることが判明した。これらの顎堤への負荷に対応して総義歯装着環境を保全するためには、咀嚼力を顎堤頂に対し側方および垂直方向に広く分散させるような咬合面形態を付与し、義歯装着者には一口で摂取する食物の量を少なくし両側で満遍なく咀嚼するように指導することが必要といえる。さらに、咀嚼時の前歯部咬合接触を無くし、前歯部顎堤をリリースすることが重要と考えられた。

本研究は総義歯装着者における咀嚼時の上顎総義歯床下顎堤粘膜の圧負担様相を口腔内で初めて解明したものであり、歯科補綴学ならびに高齢者歯科学の発展に寄与すると考えられた。

よって本論文は、博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成26年3月5日